

令和元年6月10日現在

機関番号：14701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13308

研究課題名(和文) 人新世におけるアルパイン・ツーリズムの課題と可能性の分析：日本アルプスの事例

研究課題名(英文) Challenges and Prospects of Alpine Tourism in the Anthropocene: Case study of Japan Alps

研究代表者

Chakraborty Abhi (Chakraborty, Abhik)

和歌山大学・国際観光学研究センター・講師

研究者番号：70784776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「人新世」といった地球規模の環境変化の時代における山岳地域の自然・文化的特徴を整理しながら、アルパイン・ツーリズムの持続可能性について北アルプス地域の事例から分析した。このため、北アルプスを大きく三つの地域(上高地～槍ヶ岳～穂高岳および周辺、白馬岳および周辺、立山黒部アルペンルート・奥黒部周辺)に分け、それぞれにおいて聞き取り、ランドスケープ調査、参与観察、登山者へのアンケート調査を実施し、山岳観光の当事者との情報交換を行った。研究成果を3件の査読付学術論文のほか、国際・国内学会にて報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：本研究は、「人新世」というキーワードを用いた観光学研究の中で、山岳地域の自然的、人間的要素の双方について論じる、世界的に見ても新規性の高い研究である。特に自然・文化的要素が混在する複合的システムとして山岳地域を理解し、地質・地形からなるその独自性や、当該地域の観光の特徴について知識の創生に貢献したことを強調したい。

社会的意義：多くの山岳地域は豊かな自然や文化を有することにもかかわらず、環境変化、土地利用変遷や観光開発のストレスを受け、急速に変わりつつある。そのため、山岳地域の自然・文化的価値を意識した観光取り組みが必要であり、本研究では当事者と情報交換を行い、意識の向上に貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at providing a holistic analysis of natural and cultural aspects of alpine regions and their associations with tourism, against the backdrop of planetary level environmental change termed as the 'Anthropocene'. The case study of North Japan Alps, a part of the circum-Pacific orogenic mountain belt, was used for this purpose. The region was divided into three 'segments' (Kamikochi-Mt. Yari-Mt. Hotaka and surrounding peaks and valleys; Mt. Shirouma and surrounding peaks and valleys; and Tateyama-Kurobe Alpine Route and surrounding peaks and valleys). During the field research phase, detailed in depth interviews, landscape surveys, participant observation, and questionnaires aimed at tourists were conducted. During the second year of the project information exchange sessions with local stakeholders were also held. Results and associated findings/insights were reported in three internationally peer reviewed articles and several conference papers.

研究分野：観光学

キーワード：人新世 アルパイン・ツーリズム 複合的システム ランドスケープ 北アルプス

1. 研究開始当初の背景

本研究では、「人新世」と言われる地球規模の環境変化の時代における、山岳地域の観光(アルパイン・ツーリズム)の変遷について北アルプス地域の事例から分析を行うことを目的とした。特に、観光学分野ではこれまであまり分析されてなかった、巨大な時空間スケールにまたがる地質・地形的プロセスの特徴、生態系の進化と、近年におけた観光を含む人間の空間利用について論じながら、山岳地域独自の背景を意識したサステナブル・ツーリズムについて知識を創生することを目的とし、自然的变化と社会的変化が混合した複合的システムとしてアルパイン・ツーリズムを分析することにした。

研究開始当初の背景は以下のようなものであった：

山岳地域は観光地として人気上昇している反面、観光学分野においてその自然的特徴や環境変化に関する知識の累積が不十分で、希少性の高い山岳地域における観光は対象地域の自然や文化的環境にどのような影響を及ぼすかに関する学術的分析が不足していた。地球規模の環境変化からアルパイン・ツーリズムが受ける影響についての先端的な研究をまとめた書籍は Musa 他「Mountaineering Tourism」のみであり、環境変化と高山観光地域の関係を扱った学術書として Gossling, Hall の「Tourism and Global Environmental Change」、Scott 他「Tourism and Climate Change」などがあつたが、いずれも観光対象地域の自然的成り立ちの分析より、既存の観光取り組みの持続可能性や気候変動などがもたらす問題についての分析であることがわかつた。また、「人新世」の概念と 21 世紀のモビリティ(移動性)に根ざした研究図書として Gren, Huijbens の「Tourism and Anthropocene」を参照したが、これも主に人間の側面からの分析であることがわかつた。このような文献調査から、観光学分野において、山岳地域の観光の基礎的条件を形成する自然環境及びその変化に関する知識が非常に乏しいという現状に気づいた。一方、日本の高山環境に関する研究としては、岩田・小泉の山地の地形形成、自然的擾乱と植物環境の係に注目した地生態学の研究実績が存在していたが、地形形成のプロセスの変化と植物を中心とした研究であるため、社会的プロセスは捉えてなかつた。上記の背景を受け、特に巨大な時空間スケールにまたがる山岳地域の自然環境の成り立ち及び過去 100 年間におけるその急速な変化に主眼を置き、北アルプス地域を事例にアルパイン・ツーリズムの現状と課題、持続可能性の分析に着手した。

参考図書：

Gossling, S and Hall, C.M. (Eds)2006. Tourism and Global Environmental Change.Routledge.

Gren, M and Huijbens, E.H. (Eds) 2015. Tourism and the Anthropocene. Routledge.

Musa, G., Higham, J. and Thompson-Carr.A.(Eds) 2015. Mountaineering Tourism. Routledge.

Scott, D., Hall, C.M. and Gossling, S. (Eds) 2012. Tourism and Climate Change. Routledge.

岩田修二1974. 白馬岳山頂付近の地形—地形と残雪・氷河とのかかわりあい. 地理, 19(2), 28-37.

小泉武栄 1992.地形学と生態学の接点.地形,13, 333-339.

2. 研究の目的

本研究では以下の「課題」について調べた：

- (1) 日本アルプス地域におけるアルパイン・ツーリズムの特色は何か？当該地域ではアルパイン・ツーリズムはどのように発展、変化してきたか？
- (2) アルパイン・ツーリズムの観光資源として価値のある地質的、地形的、景観・生態系的、文化的要素は何か？それぞれはどのようなスケールで変化しているか？
- (3) ツーリズム destinations としてのアイデンティティの創出と維持に欠かせない自然的・人的資源は何か？それぞれどのようにつながっているか？
- (4) 地球規模の環境変化について、現地のステークホルダーと観光客の意識はどうなっているか？それは持続可能なアルパイン・ツーリズムにどのような影響を与えるか？

上記の課題について調べるため、北アルプスを 3 つの「対象地域」に分け、現地調査を行うことにした。それぞれの場所において、アルパイン・ツーリズム 資源と当事者の現状について理解し、地域の課題や、自然・文化的背景を意識した新しい観光の取り組みの可能性について論じることが、本研究の主目的であった。また、最終的に、3 つの「事例」の比較分析から、人新世における北アルプス地域の観光の特色と変化の総合的分析を提供することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、文献調査及び現地調査をもとに行つたものである。文献調査では、北アルプス地域の地質性、地形形成、生態系的特徴や、観光を含む人間の空間利用について既存の書籍、学術

論文、報告書や地図をもとに、二次データの収集を行うと同時に、世界各地の山岳地域における環境変化、観光の特徴などについても文献から情報を整理した。

現地調査では、北アルプスの主なピークに登山し、山岳地域の横断を行いながら、地質性や地形・生態系の特徴について現場確認作業を行った。また、各地域に位置する山小屋を拠点とした聞き取り、参与観察、アンケート調査を実施した。現地調査の一環としてGPSによる地理情報の整理及び現場調査、撮影、ビデオ録画などの方法を応用した。特に山岳稜線に位置する山小屋において数回に分けて滞在しながら取材を繰り返し、記録起こし・聞き取り・アンケート調査を実施したことで、山小屋関係者及びガイドなど、山岳地域を生活の場として利用する当事者目線について詳しく調べることができた。

一次データ、二次データの分析において、マルチ・クライテリア・マッピング(Strang 2010)、データのカテゴリー分け(コーディング)法(Miles, Huberman 1994)及び、3つの地域からの情報を比較し分析するために社会科学の研究ではよく用いられる三角測量(Triangulation)法(Denzin, Lincoln 2013)を応用した。本研究では決まった変数同士の関係の統計学的分析ではなく、現場から直接アルパイン・ツーリズムに係る資源やその課題の掘り起こしに基づいた多面的分析を行ったため、一定の標本数を求めるより、可能な限り深く多面性を持つデータの確保を目指した。

さらに、一部の地域において現地関係者と共同で調査・現場観察を実施した。山小屋関係者と共同で、現在廃道となっている山岳トレイルの再開通に向けた情報共有や、周辺の自然的環境の成り立ちや現在の観光の課題に関する情報交換に参加し、北アルプス山岳地域の独自性や今後のアルパイン・ツーリズムのあるべき姿などについて相互理解を深めた。

参考図書：

Denzin, N and Lincoln, Y. 2013. The SAGE handbook of Qualitative Research. Sage.

Miles, M and Huberman, M. 1994. Qualitative Data Analysis: An Expanded Sourcebook. Sage.

Strang, V. 2010. Mapping histories cultural landscapes and walkabout methods. In Environmental social sciences methods and research design. Vaccaro, I, Smith, E.A. & Aswani, S. Cambridge University Press.

4 . 研究成果

文献・現地調査から得た情報をもとに、これまで3件の査読付学術論文をまとめ、6件の学会発表にて報告した。現在、2018年度の調査データを踏まえた最終分析を行っており、2019年度以内に2件の学術論文にてまとめることを予定している。2017年度オンライン掲載、2018年度雑誌掲載になった「Japan's mountain tourism at a crossroads」の論文では、上高地や白馬地域の事例を紹介し、北アルプスにおける山岳観光の100年近くにわたる変化について論じた。同じく2017年度オンライン出版、2018年度雑誌掲載となった、「Challenges for environmental sustainability in a mountain destination: insights from the Shiroumadake District of North Japan Alps」の論文では白馬岳地域の事例分析を提供し、当該地域の地質性や地形的特徴を明瞭化し、高山環境の価値と脆弱性、近年における観光の特徴及び双方の関係について論じた。学会発表の一環として、2018年の日本地理学会秋季大会において「山岳地域の自然環境と社会-現在と未来」といったシンポジウムを代表者として開催し、研究者や現場関係者との議論を深めた。また、2018年度において、大町山岳博物館の協力を経て北アルプス地域の観光当事者を集めた地域勉強会も実施した。現在、2年間の調査や交流を踏まえ、北アルプスの山小屋を拠点とした自然環境に関する情報発信取り組みについて、山小屋関係者と共同で計画を進めている。このように、本研究の成果を踏まえ、実際の当事者と交流を深めながら、北アルプス地域の観光資源の現状及び今後あるべき姿について意識の向上を図り、持続可能な観光取り組みについて当事者と共同で模索することで当山岳地域の社会的キャパシティーにも貢献している。

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

1. Chakraborty, A. 2018. Challenges for environmental sustainability in a mountain destination: insights from the Shiroumadake District of North Japan Alps. *GeoJournal* (Springer), 84. 415-435. 査読付.

2. Chakraborty, A. 2018. Japan's mountain tourism at a crossroads: insights from the North Japan Alps. *Tourism Planning and Development* (Taylor & Francis), 15. 82-88. 査読付.

3. Chakraborty, A. 2018. Does nature matter? Arguing for a biophysical turn in the ecotourism narrative. *Journal of Ecotourism* (Taylor & Francis), Online first. 査読付.

〔学会発表〕(計6件)

1. 北アルプスの事例から見た人新世における動的自然の保全の課題。日本地理学会秋季大会、2018年。単独発表。
2. 複合的環境変化の理解における質的分析の重要性。日本地理学会秋季大会、2018年。単独発表。
3. Comparative assessment of mountain landscapes and their use in alpine regions. Japan Geoscience Union Meeting 2018. 単独発表。
4. 中部山岳国立公園におけるランドスケープ変化とエコツーリズム。日本地理学会秋季大会、2017年。単独発表。
5. Transition and continuity in mountain landscapes of Japan. The twenty-first Asian Studies Conference, Japan, 2017. 単独発表。
6. The role of Long Term Ecological Research in understanding dynamic geomorphological systems: insights from mountain environments and highland watersheds. Japan Geoscience Union-American Geophysical Union Joint Meeting 2017. 単独発表。